

# 『貫之集』 解釈上の問題点

— 素寂本を手がかりに —

はじめに

素寂本『貫之集』（以下、「素寂本」と称する）は、平成十六年二月に冷泉家時雨亭叢書第七十二巻『素寂本私家集 西山本私家集』に初めて全文が紹介された。上巻（巻一―巻四）の屏風歌のみが伝わる欠本であり、これは歌仙家集本（以下「歌仙本」と称する）の巻一―巻四に相当する。この素寂本は、既に、久保木哲夫氏<sup>1)</sup>、田中登氏<sup>2)</sup>によって、『貫之集』の伝本中、第一類本の新たな一系統として位置づけられている。さらに、従来知られていた本文に比べると、異同が数多く見られ、その異同には採るべき点が多い。

そこで、稿者は前稿<sup>3)</sup>で、歌の解釈に焦点をしぼり、巻四を対象として、歌仙本系の伝本を底本とした従来の注釈書と比較し

ながら、素寂本を視野に入れた『貫之集』の歌の解釈を考察した。その結果、素寂本を視野に入れて『貫之集』を読むと、従来とは異なつた解釈が可能になり、さらに歌仙本の誤りを訂正出来るということが確認出来たのである。本稿は、巻四と同様の結論が出る可能性を前提として、残りの巻一―巻三について、素寂本を視野に入れた『貫之集』の歌の解釈を考察するものである。

## 『貫之集』の伝本と巻の構成

歌の解釈の考察に入る前に、『貫之集』の伝本と巻の構成を確認しておく。

第一類 ①歌仙家集本（九卷八八九首）

北井 佑実子

陽明文庫本（近・サ・68 九卷八九二首）

東海大学桃園文庫本（九卷八九二首）

村雲切本（巻八と巻五の一部と断簡）

②素寂本（巻一〜巻四の五四五首）

③西本願寺本（一〇巻七二七首）

④資経本（巻六巻七の三一六首）

⑤承空本（七卷九二二首）／御所本（書陵部蔵510・

12 七卷九三〇首）

### 第二類

伝二条為氏筆天理図書館蔵本（九一首）

伝二条為氏筆大阪青山短期大学蔵本（九一首）

### 第三類

伝藤原行成筆貫之集切（一六葉四〇首）

『貫之集』の伝本は、第一類、第二類、第三類に大別される。

さらに第一類本は、主に巻の構成（全体の構成）により、①歌仙本系、②素寂本、③西本願寺本系、④承空本系に分かれている。巻四を対象とした前稿でも述べたことだが、ここでも歌仙本を基準とすると、巻の構成は次のごとくである。

歌仙本 素寂本	巻一	巻二	巻三	巻四
西本願寺本	巻一・巻二	巻二・巻四・巻五	巻三	ナシ
承空本	巻一・巻二	巻二・巻四・巻五	巻三	巻五

素寂本は、系統は違っても、巻の構成においては歌仙本と一致している。歌仙本と素寂本は、巻一〜巻四が屏風歌であり、歌がほぼ年代順（延喜五年〜天慶八年）に配列されているのである。しかし、西本願寺本と承空本は屏風歌の配列が年代順ではなく、共通の錯簡を有している。つまり、『貫之集』前半部の屏風歌の巻々の構成においては、歌仙本と素寂本、西本願寺本と承空本が、それぞれ同じ体裁をとっているのである。

本稿で取り上げる巻一〜巻三の場合、従来は、歌仙本系、西本願寺本系、承空本系（御所本の親本）の本文が伝わっていた。『貫之集』の第一類本は、同一祖本から派生しながら、巻の構成に大きな錯簡がない歌仙本系と、錯簡がある西本願寺本系・承空本系に分かれた。しかし、歌仙本と西本願寺本・承空本が対立した場合、本文批判的には、歌仙本同様錯簡のない素寂本が新たな対校本文として、その是非を判断する決定打になる可能性があると考えられる。

そこで本稿は、本文批判的には素寂本が有効であると思われる事例を、さらに踏み込んで解釈の面から考察する。従来の『貫之集』の注釈書は、いずれも歌仙本系の伝本を使用してきた。しかし、巻四と同様に、素寂本を視野に入れると、『貫之集』の注釈はどのように変わってくるであろうか。

次章では、素寂本、歌仙本、西本願寺本、承空本の本文異同と同時に、歌仙本系の本文を底本としてきた、日本古典全書『新訂 土佐日記』、新潮日本古典集成『土佐日記 貫之集』、『貫之集全釈』などの従来の諸注釈と比較しながら、素寂本を視野に入れた『貫之集』の解釈を試みてみたい。

### 本文異同と歌の解釈

本文は素寂本、歌番号は歌仙本に拠る。素寂本、承空本は平仮名表記に改めた。本文の傍線は稿者にて施した。<sup>⑤</sup>

六月うかは<sup>①</sup><sub>⑥</sub>

か、りひのかけしうつれはむまたまのよかはのそこは水も、えけり(一〇〇)

傍線部①…歌 六月うかは

西 六月鶺鴒川

承 六月うかは

傍線部②…歌 かけしるければ

西 かけしうつれは

承 かけしうつさは

延喜六年月次の屏風歌。素寂本の本文に従えば「篝火の影が

映っているので夜川の底は水も燃えていることだ」と解釈出来る。傍線部②に注目しよう。素寂本の「かけしうつれは」は、西本願寺本と一致し、歌仙本は「かけしるければ」、承空本は「かけしうつさは」と、それぞれ対立する。注釈書では、『全書』は「影しうつれば」に校訂しているが、『集成』『全釈』は、共に「影しるければ」で、『集成』は「篝火の影がはつきりと映っている」ので、『全釈』は「篝火がよく燃えているので」と解している。しかし、素寂本が西本願寺本と一致しているのであれば、本文批判的には、「かけしうつれは」の本文に拠るべきであらう。

なお、参考のために言えば、同じ歌が『古今和歌六帖』(第三帖 よかは)に、

か、りひの影しうつれはむはたまのよかはの水はそこも見えけり

とあり、また、『玉葉和歌集』(卷三 夏歌 三七七 貫之)に、

延喜六年、内の御屏風十二帖の歌おほせことによりて  
たてまつりける中に鶺鴒河

かがり火のかげしうつればぬばたまのよかはの底は水ももえけり

とあつて、素寂本、西本願寺本と一致している。

おなし十四年十六日十二月女四の宮御屏風のれうのうたてい  
 しの院のおほせにて

あたらしきとしとはいへとしかすかにわかみふりぬる  
 けふものイにそありける (二一九)

傍線部①…歌 十二月女四宮

西 二月廿五日女二宮

承 十二月五宮

傍線部②…歌 からくふりぬる

西 我身ふりぬる

承 わか身ふりぬる

延喜十四年女一宮⑧ (勸子内親王) 御屏風の料の歌。素寂本の

本文に従えば「新年になったとは言うけれど、そうは言っても  
 私も年をとったものだと思ふ今日であることよ」と解釈出来る。

新年を祝う反面、自分も年をとってしまったと嘆きの表白となっ  
 ている。傍線部②に注目しよう。素寂本の「わかみふりぬる」

は、西本願寺本、承空本と一致し、歌仙本「からくふりぬる」  
 とは対立する。注釈書では、『全書』は「わが身ふりぬる」に

校訂し、『集成』『全釈』は「からくふりぬる」である。『集成』

は「やはり私はどうにか年をとってきたものだ」、「『全釈』は  
 「しきりに雪が降って年をとる」と解している。しかし、本文

批判的には、素寂本、西本願寺本、承空本の「わかみふりぬる」  
 に拠るべきであろう。

なお、同じ歌が、『続後撰和歌集』(巻十六 雑歌上一〇三一  
 貫之)に、

延喜十四年女四の宮の屏風に

あたらしき年とはいへどしかすがにわが身ふりゆくけふに  
 ぞ有りける

とあり、「ぬる」と「ゆく」の異同はあるが、「わが身」につい  
 ては、素寂本、西本願寺本、承空本と一致している。

やまかせにかをたつねてやむめのはな①にほへるさ②とう

くひす①のなく② (三一一)

傍線部①…歌 にはへる程に

西 にはへるさ①に

承 にはへるさ②に

傍線部②…歌 家あめそめけん

西 いへるあめそめけむ

承 いへるあめそめけん

同じく延喜十四年女一宮 (勸子内親王) 御屏風の料の歌。素  
 寂本の本文に従えば「山風にのって伝わる香をたよりに訪ねて  
 みたのであるるか、梅の花が美しく咲き匂う里に…」と解釈出

来る。傍線部①に注目しよう。素寂本の「にほへるさとに」は、西本願寺本、承空本と一致し、歌仙本「にほへる程に」とは対立する。注釈書では、『全書』『集成』は「にほへる里に」に校訂している。『全釈』は「にほへるほどに」で、「花盛りに、梅の花の満開の頃に」と解している。しかし、本文批判的には、歌仙本の「にほへる程に」よりも、素寂本、西本願寺本、承空本の「にほへるさとに」に拠るべきであろう。

なお、傍線部②「うくひすのなく」は、素寂本の独自異文となっているが、ここは、本文批判的にみても、歌仙本、西本願寺本、承空本の「家みそめけん」に拠るべきであろう。

なお、同じ歌が、『新勅撰和歌集』（卷一 春歌上 三五 貫之）に、

山かせにかをたづねてやむめのはなにほへるさとにうぐひすのなく

とあり、素寂本、西本願寺本、承空本と一致している。第五句「うくひすのなく」は、素寂本系に拠ったのであろうか。

おなしとしの十二月やすた、の右大弁のなかのみか  
との左大臣のきたのかたの五十の賀せらる、とき上御門の屏

風のれうのうた

わかやとのまつのこすゑにゐるたつはちよのゆかりとお

もふへらなり（五二）

傍線部①…歌 延喜十五年十二月保忠左大弁

西 延木十五年二月三日右大弁やすた、

承 延喜五年二月敦忠右大弁

傍線部②…歌 千世の雪か

西 千世のゆかりと

承 ちよのゆかりと

傍線部③…歌 へら也

西 へらなり

承 なるへし

延喜十五年左大臣時平の北の方の五十賀の屏風の料の歌。素寂本の本文に従えば「私の家の松の枝の先にいる鶴は、その松を千代の縁に連なるものと思つているようだ」と解釈出来る。長寿の象徴の松と鶴を取り合わせた歌である。傍線部②に注目しよう。素寂本の「ちよのゆかりと」は、西本願寺本、承空本と一致し、歌仙本のみが、「千代の雪か」と、対立する。注釈書では、『全書』は「千代のゆかりと」に校訂している。『集成』『全釈』は「千代の雪か」とである。『集成』は「鶴の白さが雪のように松の縁に映える、千代も変わらぬ雪」と、『全釈』は「永久に消えぬ雪、千年経っても消えない雪、鶴が自分を千

年経つても消えない雪だと思つている」と、解している。だがここは、本文批判的にみて、素寂本、西本願寺本、承空本の「ちよのゆかりと」に拠るべきであろう。

なお、『古今和歌六帖』（第四帖 いはひ）には、

わかやとのまつの梢になくたつをちよのゆかりとおもふなりけり

とあつて、素寂本、西本願寺本、承空本と一致している。

ちなみに、『土佐日記』（承平五年一月九日）には、

見渡せば松のうれごとに住む鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる<sup>⑩</sup>

と、類似の表現が見えている。

なお、傍線部③「へらなり」と「なるへし」は、本文批判的には、素寂本、歌仙本、西本願寺本の「へらなり」に拠るべきであろう。

こたか、りしたる所

はなのいろをひさしきものともはねはわれはやまの<sup>⑪</sup>  
かりにこそみれ（一一〇）

傍線部①…歌 山ちを

西 山のを

承 やまのを

傍線部②…歌 かりにこそみれ

西 かりてこそみれ

承 かりにこそみれ

延喜十八年醍醐天皇皇子保明親王の屏風の料の歌。素寂本の本文に従えば「花の色をいつまでも変わらないものとは思わないので、私は山野を狩りしながらそこに咲く花もかりそめの花として見ることだ」と解釈出来る。傍線部①に注目する。素寂本の「やまのお」は、西本願寺本、承空本と一致し、歌仙本のみが、「山ちを」と、対立する。注釈書では、『全書』は「山路を」に校訂しているが、『集成』は「山路を」、「全釈」は「山路に」<sup>⑫</sup>となつてゐる。『集成』は「山路を狩りして廻りながら」と解し、「西本」「山の」書本「やま田」、西本に従えば「一一」も照応するが、「一一」の底本（歌仙家集本）「やまのを」が、西本「山の辺」書本「のやまを」となつていて、乱れているので改訂せずにおく」とある。『全釈』は「山路で」と解し、「歌の中で」「山路に」でならなければならぬ必要性が理解できず本文も揺れているが、底本のままとしておく」とあり、「山路を」の本文では解釈が困難であることを示している。この歌も、素寂本、西本願寺本、承空本の「やまのお」に拠れば、詞書の「こたか、りしたる所」とも内容的によく照応しよう。

また、傍線部②は「かりてこそみめ」と西本願寺本のみが対立するが、ここは、本文批判的にみて、素寂本、歌仙本、承空本の「かりにこそみれ」に拠るべきであろう。

りむしのまつり

山もてすれるころものあかひもの なかくそ われは かみ  
につかへむ (一三七)

傍線部①…歌 あかひもの  
なかければ

西 あかひもの

承 あかひもの

傍線部②…歌 なかくそ

西 なかくそ

承 なかくそ

延喜十九年右大臣藤原忠平の四十賀の屏風歌。素寂本の本文に従えば「山藍ですった小忌衣の長い赤紐のように、私は長く神にお仕えしよう」と解釈出来る。「赤紐」とは、神事の時に小忌衣の右肩に付けて、前後に垂れ下げる赤色の紐のことである。傍線部①に注目しよう。素寂本の「あかひもの」は、西本願寺本、承空本と一致し、歌仙本のみが「なかければ」と、対立する。注釈書では、『全書』『集成』が「あかひもの」に校訂しているが、『集成』には「次の句の「長くぞ」と重複した誤

写と見て、西本に従い改める」とある。『全釈』は、本文は「長ければ」で、「小忌衣が長いので」と解し、「長い着物を身にまとうこと」によって「長い」ことが実現する」とある。しかし、本文批判的にみれば、素寂本、西本願寺本、承空本の「あかひもの」に拠るべきであろう。なお、第四句の「なかくそ」は、承空本のみが「なかにそ」と対立するが、ここは、本文批判的にみて、素寂本、歌仙本、西本願寺本の「なかくそ」に拠るべきであり、承空本の誤写であろう。

なお、『新勅撰和歌集』(巻八 羈旅歌 五五〇 貫之)には、

おなじ心をよみ侍りける

山あるもてすれる衣のあかひもの ながくそ われは神につかふる

とあって、素寂本、西本願寺本、承空本と一致している。

ゆきのふれる

はるこねとくさきにはなのさくことはふりくるゆきのこ、  
ろなりけり (一三八)

傍線部①…歌 春くれと

西 はるこねと

承 はるこねと

傍線部②…歌 さく程は

西 さくことは

承 さくことも

同じく、延喜十九年右大臣藤原忠平の四十賀の屏風歌。素寂本の本文に従えば「まだ春は来ていないけれど、草木に花が咲いているのは降ってくる雪の思いやりであった」と解釈出来る。草木に降りかかる雪を見立てている。傍線部①に注目しよう。

素寂本の「はるこねと」は、西本願寺本、承空本と一致し、歌仙本のみが「春くれと」と、対立する。注釈書では、『全書』『集成』は「春こねと」に校訂している。『全釈』は「春くれと」で、「すでに年内立春になって晴れているけれど」と、「春くれと」を「春になっていくけれど」と、年内立春のことと解釈している。確かに、一首前の一三七番歌が、「臨時の祭」を詠んだ歌なので、配列ではこの歌は年末にあたる。しかし、詞書には「ゆきのふれる」とあるので、ここはただ単に、冬の草木に降りかかった雪を花に見立てて詠んだものと思われる。この歌も、本文批判的には、素寂本、西本願寺本、承空本に拠るべきであろう。また、傍線部②「さくことは」は、西本願寺本と一致し、歌仙本「さく程は」、承空本「さくことも」と、対立するが、本文批判的には、素寂本、西本願寺本に拠るべきであろう。

なお、『古今和歌六帖』（第一帖 ゆき）に、

春こねと草木に花のさくことはふるしら雪のかゝるなりけり

とあって、素寂本、西本願寺本、承空本と一致している。

つるのいけのほとりにある所

さゝらなみよするみきはに<sup>①</sup>すむつるやきみかへむよのし<sup>②</sup>

るへなるらむ（一八四）

傍線部①…歌 所に

西 みきはに

承 みきはに

傍線部②…歌 すむつるは

西 すむ鶴や

承 すむつるは

傍線部③…歌 しるへ

西 しるへ

承 しるし

延長四年藤原清貫の六十賀の屏風歌。素寂本の本文に従えば「小さな波がよせてくる水際に住む鶴は、それはあなたがこれから過ぐすであろう年のしるべであるでしょう」と解釈出来る。傍線部①に注目しよう。素寂本の「みきはに」は、西本願寺本、



承空本と一致し、歌仙本のみが「所に」と、対立する。注釈書では、『全書』『集成』は「みぎはに」に校訂している。『全釈』は「所に」で、「さざ波がしきりによせている所」とする。しかし、本文批判的には、素寂本、西本願寺本、承空本の「みきわに」に拠るべきであろう。

なお、『古今和歌六帖』（第四帖 いはひ）には、

さ、らなみよするみきはにすむつるはきみかへんよのしる  
へなりけり

とあって、素寂本、西本願寺本、承空本と一致している。

ちなみに、『貫之集』（巻四 四五八）には、

みちゆく人このいえにつるのむれたるをみたり

よそなれはみきはにたてるあしたつをなみかゆきかとわき

そかねつる

とあって、類似表現となっている。

なお、傍線部②「すむつるや」と「すむつるは」の対立は本文批判的に決定し難い。傍線部③「しるへ」と「しるし」は、承空本の誤りであろう。

夏

① 皇十七 とう宮とある本あり  
延長六年中宮の御屏風のれうのうた右近権中将うけた

まはりて

あしひきにひきつれてこそちはやふるかものかはなみたち<sup>②</sup>  
わたりけれ（二四四）

傍線部①…歌 延長六年中宮の御屏風のうた四首右  
近権中将うけ給りて

西 延喜十一年東宮御屏風の歌右近衛中  
將のきみの被伝仰

承 延喜六年中宮御屏風に

傍線部②…歌 あれひきに

西 あれひきに

承 あしひきの

傍線部③…歌 うちわたりけれ

西 たちわたりけれ

承 たちわたりけれ

延長六年醍醐天皇中宮藤原穩子の屏風歌。まず、傍線部③から検討する。素寂本の「たちわたりけれ」は、西本願寺本、承空本と一致し、歌仙本のみが「うちわたりけれ」と、対立する。注釈書では、『全書』は「立ち渡りけれ」に校訂している。『集成』『全釈』は「うちわたりけれ」で、『集成』は「賀茂川の流れを渡ってきた」、『全釈』は「波打つ賀茂川を渡ったことだ」と、解している。しかし、本文批判的に、素寂本、西本願寺本、

承空本の「たちわたりけれ」に拠るべきであろう。結果としては、従来とかなり近い解釈になっているが、本文批判的には、素寂本に拠るべきであろう。

なお、『古今和歌六帖』（第二帖 やしろ）には、

あれひきにひきつれてこそちはやふるかもの河なみたちわたりけれ

とあり、素寂本、西本願寺本、承空本と一致している。

傍線部②の場合、本文批判的には決定し難いが、「あしひきの」では意味が通じにくい。素寂本も、書き入れの「あれひきに」に従うべきであろう。

ちることもいろさへともにもみちは、も、とせふれとかはらさりけり（二九二）

傍線部①…歌 紅葉、は

西 もみちはを

承 もみちは、

傍線部②…歌 かひなかりけり

西 かはらさりけり

承 かはらさりけり

延長七年醍醐天皇の屏風歌。素寂本の本文に従えば「絵に描かれた」紅葉は散ることも色づくこともさへもともに、百年経つ

てもやはり変わらないことよ」と解釈出来る。（絵に描かれた）紅葉の盛衰が何年経つても変わらないことを詠んだ歌である。

まず、傍線部①「もみちは、」であるが、ここは西本願寺本のみが「もみちはを」と、諸本と対立する。ここは本文批判的にみても、素寂本、歌仙本、承空本の「もみちは、」に拠るべきであり、従来の解釈で問題ないであろう。次に、傍線部②である。素寂本の「かはらさりけり」は、西本願寺本、承空本と一致し、歌仙本のみが「かひなかりけり」と、対立する。注釈書では、『集成』は「かはらさりけり」に校訂しているが、『全書』『全釈』は「かひなかりけり」を採用する。『集成』では、「かひなかりけり」は不審、陽本「ひなか」の傍記に「はらさ」とあり、書本「かはらさりけり」に作るのに従って改めた」とある。『全釈』では、「ききめがないことだった、紅葉の葉は散ることも変色も百年続いているが、その効果もなく、あなたの上には、散ることも変色もまったく無関係であった」と解しているが、本文批判的に、素寂本、西本願寺本、承空本の「かはらさりけり」に拠るべきであろう。

おわりに

『貫之集』は、巻一―巻三に關しても、本文批判的に素寂本に拠るべきであろう箇所があると考えられる。本稿で示したのは、僅か十例であるが、このような例は他にも見出すことが出来る。

先に、巻の構成でも触れたが、『貫之集』の第一類本は、同一祖本から派生しながら、巻の構成に大きな錯簡がない歌仙本系と素寂本、錯簡がある西本願寺本系と承空本系に分かれた。そこで、巻の構成に錯簡がある西本願寺本と承空本の本文が、錯簡がない歌仙本の本文と対立した場合、錯簡がない素寂本の本文が、西本願寺本と承空本に一致すれば、その本文は歌仙本の誤りであることは明らかであり、素寂本、西本願寺本、承空本に拠るべきであろう。さらに、その本文を踏まえて解釈すれば、従来とは異なつた解釈も可能となろう。

注

(1) 冷泉家時雨亭叢書第七十二卷『素寂本私家集 西山本私家集』解題(朝日新聞社 平成十六年)

(2) 「素寂本貫之集の意義」(『関西大学文学論集』第五十四巻 第一号 平成十六年七月)

(3) 「『貫之集』巻四の解釈―素寂本を手がかりに―」(『関西大学『国文学』第九十一号 平成十九年三月)

(4) 使用する注釈書

日本古典全書『新訂 土佐日記』萩谷朴氏(朝日新聞社 昭和四十四年) 底本は歌仙家集本 本文中の略号は『全書』  
新潮日本古典集成『土佐日記 貫之集』木村正中氏(新潮社 昭和六十二年) 底本は歌仙家集本 本文中の略号は『集成』

『貫之集全釈』田中喜美春氏 田中恭子氏(風間書房 平成九年) 底本は陽明文庫本 本文中の略号は『全釈』

(5) 使用テキスト

素寂本 冷泉家時雨亭叢書第七十二巻『素寂本私家集 西山私家集』(朝日新聞社 平成十六年)  
歌仙家集本 正保四年刊版本『歌仙家集』 本文中の略号は「歌」

西本願寺本 『三十六人家集』(三十六人家集刊行会 昭和九年八月) 複製本 本文中の略号は「西」  
承空本 冷泉家時雨亭叢書第六十九巻『承空本私家集上』

(朝日新聞社 平成十四年) 本文中の略号は「承」

『新勅撰和歌集』『続後撰和歌集』『玉葉和歌集』 『新編

国歌大観』本

『古今和歌六帖』 図書寮叢刊『古今和歌六帖 上巻 本文

編』(宮内庁書陵部 昭和四十二年)

『貫之集』 素寂本

『土佐日記』 新潮日本古典集成『土佐日記 貫之集』木

村正中(新潮社 昭和六十三年)

※勅撰集の歌番号は、『新編国歌大観』に拠る。

(6) 詞書は、後の手が加わり、改変されることがあるので、ここでは異同を示す程度にとどめる。以下、詞書の例に関し  
ては、同様の措置をとる。

(7) どの伝本に拠って校訂したかは不明である。以下、『全書』の校訂は同様である。

(8) 歌仙本、素寂本は「女四宮」、西本願寺本は「女一宮」、承

空本は「五宮」となっており、本文が揺れている。『貞信

公記』(『大日本古記録』東京大学史料編纂所編 岩波書店

昭和三十一年)の、延喜十四年十一月十九日の条には、

「辛亥今上 女一公主始着裳」とあるので、ここは、西本

願寺本の「女一宮」に従う。

(9) 『集成』は、西本願寺本によって校訂している。以下、

『集成』の校訂は同様である。

(10) この歌の解釈は、片桐洋一氏「松鶴図淵源考」(『古今和歌

集の研究』明治書院 平成三年)に詳しい。

(11) 『全釈』の底本は陽明文庫本なので、ここは歌仙本とは異なり「山路」となる。

(12) 承空本の写しである御所本。

(13) 歌仙本系統の祖本的役割の村雲切も、歌仙本と同じ本文である。

(14) 注(13)と同様。

(15) 「このいえに」は、歌仙本、承空本では「かはのほとりに」となっている。

(16) この屏風歌歌群の詞書の年号は、素寂本、承空本は「延長七年」であるが、歌仙本、西本願寺本は「延喜のすゑよりこなた延長七年よりあなた」となっている。

(きたい ゆみこ/本学大学院生)